9)，毛などがあげられる。

次に 14 群について分布を図示した。Byronia など3群 (Maps 1—3) は計 43 種をふくみ，熱帯に限って分布し，Byronia は本科の中で最も原始的な種をふくみ，非常に古い長い間隔離されたものである。他の5群 (Maps 4—8) には約 100 種が属し，広く太平洋の両側に隔離分布を示すが，その分布の中心は東亜の亜熱帯と暖帯で古型の種をふくみ，それから南北にひろがっている。残りの6群 (Maps 9—14) は計 34 種で主に東南アジア大陸に分布している。

モチノキ科の進化の歴史は化石から推察され，漸新世にはすでに広分布のかなり進んだ群があったことから，その原始形はもっと古いものと考えられる。多分白堊紀に Ranales の祖先形から起源を発し，その原始形は絶滅したが，それからでた多くの子孫が色々な形質をつたえて現在のモチノキ科植物ができたのであろう。東亜大陸の亜熱帯が本科の主な群を構成する種の第一次の発生地であり，ある群ではボルネオやニューギニアが第二次の中心である。太平洋の東側のアメリカ大陸には種類は全く貧弱である。

□ П. Г. ГОРОВОЙ: **зонтичные приморья и приамурья** (沿海州及び黒竜州のセリ科植物) pp. 293, figs. 152. HAYKA, 1966. ウラジオストックの Institute of Biologically Active Substances, Far-eastern Branch of the Siberian Department, Academy of Sciences of USSR の candidate である P. G. Gorovoi 氏の著作であり，極東地方のセリ科植物を約9年間に亘って調査研究した結果報告である。内容は 1) 資料の調査，2) 研究沿革，3) 分類学的見解，4) 生態，5) 地理的分布，6) 化学的成分，7) 経済的意義の7項目に分けられ，詳細に意見が盛られている。分類の項では殆んど各種の全形図，果実の断面図，分布図等が挿入してあり，特に果実の写生図は細かく描かれているので，属や種の鑑別に非常に役に立つ。この書は日本のセリ科植物を調べる上にも大いに参考になるものである。同氏は昨年開催された太平洋学術会議に出席していた為，二度会談する機会を得，色々意見の交換をする事が出来た。その結果，オオバミツバ (*Ostericum melanotilingia* (De Boissieu) Kitagawa=*O. crassum* (Nakai) Kitagawa) と *Ligusticum purpureopetalum* Komarov とが同一種である事が確認され，又 *Angelica polymorpha* Maximowicz 即ちシラネセンキュウと見なされている原標本はヤマゼリ (*Ostericum Sieboldi* (Miquel) Nakai) である事が判り，更にアジア東北部のハナウド属で，オオハナウド，ウラゲハナウドと呼ばれている種は北米の *Heracleum lanatum* Michaux では決してなく，私が最初採用した事のある *H. dulce* Fischer が正当な学名であると強調されていたので，ここに一応報告して置く。

（北 川 政 夫）

□ A. D. J. MEEUSE: **Fundamentals of Phytomorphology,** pp. 231 1966, Ronald Press, New York. $10.00 著者は Amster 大学の教授。Lam 一派の New Morphology の展開者で，古典的な gross morphology はその解釈が被子植物中心であるために多くの誤をおかしたとする。彼は Zimmermann, Takhtajan などに反対し，化石シダ植物との homology においてすべてを明快に割切る。すべての雄芯系 (Androecium), 雌芯系 (Gynaecium) を彼の考える分枝の ground pattern の退化，減少，融合の結果として統一する。また，雄芯が遠心的または求心的に成熟する被子植物の2群もこの中に包含される。phyllospory, stachyspory も同一カテゴリーの別の発展と見る。結論として，被子植物は多型の裸子植物のそれぞれにつながる多元的なものと見，多型の裸子植物はもっと古いシダ植物から分れたとする。あまりに観念的な彼の見解は哲学が多すぎて，ついて行けない所もある。初心者向きの著書ではないと断っているが，物を知らない人の方がかえってついて行ける面があるのではあるまいか。R. Merville が展開している同じ方向の努力と比べると，ground unit のとり方が簡単なだけに分りがよい。しかし，もし簡単な unit を決めて，その離合集散，部分的な退化，減少をある系列でまとめ，これらを実証するのに色々の化石，特殊化した現生の植物の諸器官をあてはめて行けば，いかなる統一見解に持って来ることもできるのではあるまいか。この場合 unit が簡単であるほど，説の組立ては容易であろう。書中から一例をあげると，花に関する unit は Anthocorm (花茎枝) であり，これは苞葉をもった主軸から側生する幾個かの gonoclad (生殖枝) から成立っている。生殖枝には sporophyll (胞子葉) が幾個か着き，雌性枝には幾個かの胚珠をもつ cupule (小盃体)，雄性枝には幾個かの synangium (集合胞子嚢) がつくとする。たとえば，これをイチョウに当てはめると，器官の減少によって雌・雄花となる。この場合，雄花では苞葉は苞葉の形で止り，雌花では普通の葉となると考える。この様に割切った仮説に対しては，いささか皮肉な見方もしなくたるが，もし将来これが実証されるあてがあるならば，仮説を思いつく imagination も高く買われるべきものかも知れない。 (津山 尚)

□伊沢凡人：**原色日本薬用植物事典** (1) 1966 誠文堂新光社，3500円。全3巻の中の第1巻である。製薬原料植物よりも一般の保健医療に結びつきの深いもの600余種を選定し，科の和名を五十音順に配列してアオイ科〜キブシ科まで134種をのせてある。カラープレート36頁には薬用部分を示すことに努めてある。薬用植物という実体を挟んでの，基礎的研究分野と臨床分野との溝を埋めるべく苦心し，薬用部，成分，薬理作用，漢方，西洋医学，民間療法などの項目を分けて記述してある。漢方入門に役立ち，基礎研究のテーマも見出されようし，一般人には家庭での漢方療法の手引きとなろう。植物名を見ると学名は古いものが時折目につく。然し現行の名が併記されたものもあるので，従来の薬学書との結びつきを考えてのことであろう。カラー57図のランヨウアオイとあるのはカンアオイのようである。 (水島正美)